

新春メッセージ

【国際教養大学理事長・学長】
中嶋嶺雄

世界に羽ばたく人材を育てる

これからの日本にとって必要なのは

日本人としてのアイデンティティーを持ち

世界のグローバル化をリードできる人材

そんな学生を育てる画期的な教育とは――



Profile

なかじま・みねお

1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院修了。社会学博士。1995～2001年、東京外国語大学学長。現在はアジア太平洋大学交流機構（UMAP）国際事務総長、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長）、財団法人大学セミナー・ハウス理事長なども兼務。主な著書は『現代中国論』『中ソ対立と現代』『北京烈烈』（サントリー学芸賞受賞）『国際関係論』『中国・台湾・香港』など多数。2003年度「正論大賞」受賞。

授業は全部英語で行う 学生は1年間海外留学

秋田にあります国際教養大学は二〇〇四年、日本初の公立大学法人として出発しました。これからは少子化が進み、どんどん大学が倒産するような環境で

すから、今まで日本になかった斬新な大学にしようということでした。生まれた大学です。

まず、すべての授業を英語で行っています。「英語を学ぶ」を超えて、「英語で学ぶ」大学です。学内の会議もすべて英語で、全学生が一年間、海外留学

します。留学するまでにはTOEFLを五百五十点クリアしなくてははいけません。学生は一生懸命勉強しますから、図書館は二十四時間オープンです。

少数制で、定員は当初百人、二年目から百三十人、現在は百五十人です。グローバル・ス

タンダードの大学にするため、一年を春と秋の二つの学期に分けるセメスター制を採用しました。欧米では一般的で、四月だけでなく九月入学もできます。

昨年九月に発足した大学院もグローバル・コミュニケーション実践研究科という、日本にこ



キャロリン・ハンシン

【ジュネーブ国連ヨーロッパ本部WFWP代表】

■国連NGOとしての活動

私は国連NGOのワーキンググループに入って活動しています。その中で、書類や意見書を作成するよう要請され、やがて事務総長に提出する文書の作成をするようになりました。また、平和の文化に関するタスクフォースの議長を、何度か務めたこともあります。

また、活動報告をするためにパリのユネスコ本部やフランス赤十字社、そして多くの大使のオフィスを訪れました。

ある経験豊富なNGOの同僚からは、あまり謙虚になりすぎず、それでいて自分のNGOをちよつと宣伝するために、ワーキンググループの代表になる機会を利用することを学びました。それは、とても賢明で効果的なやり方でした。

また、ユネスコのオンライン百科事典の記事を書くよう要請され、何日も徹夜しながら調べ

て、記事を書きました。「尊厳・平和の文化の礎」というタイトルを付け、国連で得た知識で形を整えました。内容はWFWPの指導理念から学んだものです。

■出産で女性らしさを再発見

私は一九五三年、六人兄弟の長女として、米国ケンタッキー州に生まれました。父は教師で市長を務めたこともあり、母は小学校の校長をしていました。私は小さいころから動物が大好きで、大学では生物学を学び、将来はアラスカの自然保護区で、生き物を相手に働こうと考えたこともあります。

スイス人の夫と国際結婚した後、スイスに住むようになり、第一子を出産したのをきっかけに、自分の中の「女性らしさ」を再発見しました。結婚前は自分中心に物事を考えていました。が、夫や子供に愛情を注ぎ、互いに助け合うことを通して、私自身が大きく変わっていったの

です。それは、私にとって思いがけない大きな感動でした。

平和の文化をつくる上で最も大切なことは、「私から始める」ということです。家に帰ると、私はその言葉でテストされます。「あなたの家庭に、それはあてまるのか」「七人の子供たちと夫との日常生活の中に、それはあてはまるのか」と。

私たちは、家庭で平和の文化をつくることができるでしょうか？子供たちに正しい心構えと、平和の文化の本質である「ために生きる」伝統を相続させることができるでしょうか？ 本当に見返りを求めずに人を許して、それを忘れることができるのでしょうか？

私たちは、自分がいつも正しい判断をしているわけではないことは、よく知っています。それでも、いろいろな失敗から学び、次に同じことをするならば、正しいことをすると強く決意しています。そんな私から、平和の文化は始まるのです。



れまでない専門職大学院です。

国際的に活躍する人を 英語教育の変革が必要

英語教育に力を入れているのは、国際語としての英語をしっかり話せ、国際的に活躍する層を厚くしていかないと、世界における日本の存在感が弱くなってしまうからです。

最近「ニューズ・ウィーク」国際版に、著名なジャーナリストが、日本の外交官が中国の外交官に比べ劣っているのは、英語がうまく話せないからだ、と書いていました。中国の外交官はパーティーに積極的に参加し、会議後もいろいろな人と話をしているのですが、日本の外交官はそうではありません。

日本では普通、中・高・大学と十年間、英語を勉強しますが、CNNやBBCを聞いて分かる人は大卒者の0・01%。これでは教育機関として失格と言われても仕方ありません。英語を使って外国人と普通のコミュニ

ニケーションさえできないのですから、英語教育は根本的に改めなくてはいけないと思います。

名曲を聞かせて育てる 「スズキ・メソード」

学校教育の前に、私は幼児教育と家庭教育が大変重要だと思っっています。音楽教育で知られる「スズキ・メソード」の創始者で、私の恩師でもある鈴木鎮一先生はロングセラー『愛に生きる』（講談社現代文庫）の中で「義務教育前のすべての子供の成長のために、全精力を注いでほしい」と言っています。就学前の教育がいかに大事かということですね。

「スズキ・メソード」を要約しますと、「頭脳の柔らかいうちにバッハやモーツァルトを聞かせながら育てるということですが、繰り返し何回も良い音楽を聞いて覚え、それを自分のものにしてます。暗譜と繰り返しスズキ・メソッドの二つの大きな要素で、それによって子供は一つの型を

覚えます。この型を覚えることを、今の日本の専門教育は疎かにしているのです。型を徹底して教えることを忘れて、教師が子供に妥協しています。

教育は英語で「エデュケーション」ですが、この語源は「導く」です。東洋的な文脈では、孟子の「教えてこれを育つ」、基本をしつかり教えて育てる、ということですが。ピカソのような抽象画は綿密なデッサンがあつて初めてできます。基礎をしつかり教えるのを疎かにしても教育が成り立つ、と思つたところに大きな間違いがあります。

外国語をマスターして 自分の世界を広げよう

私はスズキ・メソッドと英語教育は、非常に関連性があると思います。英語教育は、できれば脳の柔らかな幼児期から始めたほうがいい。まず繰り返し耳から覚え、聞くことができます、自然に話せるようになります。

日本の英語の先生は90%が文

法主義者です。文法も必要ですが、コミュニケーションができるようになってから覚えればいいのです。国際教養大学はそういう英語教育をしています。

小学校での英語教育の導入が決まりましたが、五、六年生から週一時間、約三十週というのは非常に中途半端です。中国や韓国の子供の英語力に追いつけません。これからの時代は英語力も国力の一つですから、英語教育を根本的に改めないと、世界から取り残されてしまいます。英語はこれからという人は、ぜひ挑戦してみてください。高齢の方はなおさら、脳の活性化にも役立ちます。何回も繰り返すことによって外国語を話せるようになります、世界が広がり、それだけ人生が豊かになります。

教育の平等主義はだめ 能力別の教育をすべき

日本の教育におけるもう一つの大きな間違いは、平等主義です。教育は、能力が上がった段

階から、それをエンカレッジして、さらに伸ばしていくものです。生徒たちはそれぞれレベルが違うので、そのレベルに応じて教育する必要があります。

しかし、平等主義のため、運動会ではみんな一等賞を取るような教育が、戦後日本ではいいとされてきたところに、大きな問題があります。

伸びる人は伸ばし、遅れている人には、それに応じた指導を行う。例えば、秋田のような田舎で育った学生が国際教養大学に入学して、外国人と初めて接するとなると、初めはおどおどしています。だけど一生懸命に勉強すると、あつという間にTOEFLのスコアが上がります。そのためには、能力別の教育が必要で、それは不平等ではなく、できる人はどんどん伸ばしてあげるといふことです。

学力日本一の秋田県 心が豊かな子供たち

秋田県は田舎だと思っていた

ら、全国学力テストで二回にわたって全国一位になりました。なぜ秋田の子供が、学力で全国一位なのでしょう。

県の幹部によると、秋田市よりも田舎に行けばいくほど成績が良くなるということです。ほとんど毎日、親と一緒に朝ごはんをきちんと食べているので、田舎の子供は心が非常に安定しています。塾がなく、テレビを見る時間も少ないそうです。今の子供はテレビやゲーム、携帯電話に時間を取られています。IT革命はよいところもありますが、弊害があまりにも大きすぎると思います。

また、秋田はお祭りの多いところで、竿燈まつりには、私も法被を着て学生と一緒に参加します。日本のお祭りの中でも、これを見ないと日本文化は分からないでしょう。それに西馬音内の盆踊りです。そういうお祭りに子供も加わっていることが、秋田を学力テストで全国一位にしている大きな要因だと思います。



**押し寄せるグローバル化
対応できない日本の教育**

国際教養大学は、英語教育ばかりに力を入れていくわけではありませぬ。学生はみんなよく挨拶をします。挨拶は大変重要で、教育の第一歩だと思えます。また、全学の必読文献は新渡戸稲造が一八九九年に英語で書いた『武士道』です。今の大学生が新渡戸の書いたような本を英語で書けるでしょうか。

新渡戸は明治六年、十一歳で私の前任校の前身である東京外国語学校に入学しました。この時期は日本で英語熱が高まり、岡倉天心や内村鑑三、嘉納治五郎といった人たちが英語を学んでいます。明治になって、日本にグローバル化の波が押し寄せたのですから、今の時代と似ているのです。

私の印象では、現在のグローバル化は一八九九年に始まっています。この年に、ベルリンの壁が崩壊し、中国では天安門事

件が起きました。あれからちょうど二十年になります。この間、世界はものすごく変わっています。しかし、この世界の変化に、日本の教育は対応できていないのでしょうか。

**グローバル化を先取りし
世界をリードする日本に**

グローバル化はよいことばかりではなく、弊害もあります。グローバル化で、かつての社会主義圏のハンガリーがEUに加盟したのはよかったです。オランダから安いチューリップが入ってきたため、ハンガリーの花農家が非常に苦しんでいます。日本でも、中国製の安い食品が大量に入ってきて、農家が困り、食の安全が脅かされるなどの問題が起きています。

しかし、これからの時代、グローバル化は避けて通れません。悪いものが入ってくるからと言って、日本が門戸を閉ざすことは不可能です。むしろ、日本はグローバル化を先取りする形で、

よりよい方向に世界をリードし、必要があると思います。

国境のバリアが低くなるにつれて重要になってくるのは、日本人としてのアイデンティティをしっかりと持つことです。そうでないと、グローバル化の波に押し流されてしまい、日本の存在感もなくなってしまう。子供や若者たちに、日本人としてのアイデンティティをしっかりと植え付けていくことが、これからの教育の根幹になっていくでしょう。

さまざまな国際体験を積んで感じるのには、日本はいい国だということ。いかに中国が進んでいると言っても、人権や環境などで大きな問題を抱えており、まだまだ成熟した社会ではありません。

日本の良さに自信を持ち、さらにそれを高めていくことです。そして、この素晴らしい日本を担える人材を育てるために、今の私たちが全力を尽くす必要があると思います。

ideal family

1
Jan. 2009

アイディアル ファミリー-2009年1月号 2009年1月1日発行(毎月1日発行)第21巻第1号(通巻239号)平成2年8月10日第3種郵便物認可

21世紀の光——NGOと女性
月刊 アイディアル・ファミリー

Monthly Theme

私から始まる平和の文化

